

鐘引

一名

引鐘

前

ワキ 園城寺の僧

ヲカシ 能力

ワキヅレ 徒僧

シテ 里人

後

ワキ 前に同じ

シテ 龍神

地は

季は

地は

雜

近江

「是は江州園城寺の住僧にて候。さても当寺の鐘余りにちひさく候ふほどに。今日集会をなし。鐘を大きに鋸させばやと存じ候。

ワカシ
「いかに申し上げ候。藤太秀郷の方より当寺へ御状の御座候。

ワキ
「何と秀郷のかたより御状の有ると申すか。

ワカシ
「さん候。先々御状を御覧候へ。

ワキ
「何々畏つて申し上げ候。さても秀郷はからざるに

龍宮に頼まれ。変化の蜈蚣を平らげ候。其勲功に十種の贈物あり。中にも妙なるは一つの梵鐘なり。其こゑたへにして聞く人菩提に至るといへり。

しからば此鐘を園城寺へ寄進申すべきなり。今夜かららず龍宮より来るべし。龍神に法味をなし給はゞ。あへて疑あるべからず。なんぼう不思議なる文にて候。

ワキツレ
「是は秀郷の申されごとにて候へども。先づ鐘を持

参申してこそ候へ。 いまだ目に見えざる鐘をかや

うに申され候ふ事。 天晴秀郷の聊爾かと存じ候。

ワキ 「いや／＼秀郷と申すに。 五常乱れぬ名将なり。 か

まへて疑有るべからず。 八歳の龍女は釈尊に。

地 「宝珠を捧げ忽に。 ／＼。 南方無垢の成等を。 とな
へし例あり。 実に有難やたのもしや。 是につきて
もいやましに。 法の力を頼むなり。 ／＼。

シテ一聲 「我曠劫のむかしより。 末法の今に至るまで。 五衰

かうかいの海にしづみ。 海人の刈る藻にすむ虫の。
我からぬらす袂かな。

ワキ詞 「不思議やな是に出でたる者を見れば。 姿は正しく
人間なるが。 五衰三熱の苦しみを。 悲しむ声の聞
ゆるぞや。 いかなる者ぞ名を名のれ。

シテ詞 「是は此浦にすむ龍神なるが。 鐘を施入の其為めに。
是まであらはれ出でたるなり。

ワキ 「ふしぎやさては秀郷の。

シテ
「偽らざりし。

ワキ
「かねことの。

地
「末とほりなば今世の。く。不思議なるべし。

疑はで待たせ給へや。

クリ地
「夫れ撞鐘といつぱ。十二因縁を表し。十二律の響
あり。夜昼の刻限を告ぐる事。生死迷悟を示す
とかや。

サシ
「然るに此鐘は。祇園精舎の北面に掛けし鐘なり。

地
「玄奘三蔵渡天の時。龍神法楽の其ために。流砂河
に沈め給ひしを。守護して今に至るなり。去る程
に此海の。龍神に敵をなす。鉄の蜈蚣ありしなり。
ある時秀郷。勢田の橋を通りしに。大蛇となりて
行きむかひ。頼む心の末とげて。神通の弓矢にて。
忽に敵を亡ぼし。秀郷が其名は。末代に隠れよも
あらじ。

シテ
「其時龍神秀郷に。

地

「数の宝を贈りしに。中にも妙なるは。此鐘の法の力による故。此寺に施入すべきなり。疑はせ給ふなど。夕べの風に声たてゝ。物さわがしき海づらに。行くかと見しが沖津浪に。立ち隠れ失せにけり。浪間にかくれ失せにけり。」（中入）

ワキ詞

「不思議やさては秀郷の。いつはらざりしかねことの。頼もしかりし言葉の末。其契約をたがへじと。法味をなして待ち居たり。待つ程はくるしき物か

ほとゝぎす。

地
「一声いそげ暁の空の。風遠近の雲むらだちて。湖の浪も動搖せり。

地
「志賀辛崎の海づらに。く。立ちくる白波の。上にうかべる鐘を守護し。

後ジテ

「遮竭羅龍王顕はれ出づれば。

地
「無数の小龍無辺の悪龍。みなことぐくうかび出でゝ。此鐘の綱手に取りつきすがりつき。引くと

ぞ見えしが。程なく寄りくるさゝ波や。三井寺の

鐘楼に引き上げたり。まのあたりなる奇特かな。

シテ「遮竭羅龍王その時に。く。かの撞鐘の声を出だして。衆生の冥闇を晴らさんとて。東方に廻りて鐘をつけば。

シテ「諸行無常の響を出だし。

地「さて又南方は。

シテ「是生滅法。

地「西方に向へば。

シテ「生滅々已。

地「北方に廻れば。

シテ「寂滅為樂と。

地「つけば其声心耳をすまし。聞く人則ち菩提に至り。

仏法興隆。伽藍繁昌に守るべしと。諸龍一度に頭を傾け礼をなせば。夜もしらくと明け行く空に。龍神は眷属を引きつれく。立ち帰る波の逆まく

水に。浮き沈み。さかまく水に浮き沈んで。又
龍宮にぞ入りにける。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「謡曲評釈 第二輯」大和田建樹著